

アヒム・フォン・アルニムの *Die Majoratsherren*

二 宮 ま や

1

アヒム・フォン・アルニム (1781-1831) の *Die Majoratsherren* (長子相続財産の所有者達) は *Taschenbuch zum geselligen Vergnügen* 1820 年号 (出版年1819) に発表された。これは140年も経ってから、ヘーネル¹⁾ が控え目ながらもホフマンスタールの選²⁾ に異議を唱え、アルニムの短篇の最高傑作とも言おうとした程の作品である。また、1965年にアルニムの長短篇小説をまとめた3巻本を出版し、アルニム読書に貢献したミッゲも、その解説でこの作品のことを「その主題設定においても、筆致の芸術的理解力においても、彼の作品の中で特別な位置を占める、アルニムのきわめて天才的な傑作」³⁾ とよんでいる⁴⁾。しかしその成立事情ははっきりしていない。まず作者自身の言葉がほとんどない。そして当時一般読者以前に、友人達の反応が否定的であった。あらかじめこの本を送られたらしいヤコブ・グリム (Jacob Grimm 1785-1863) は、失望の色を隠すことなく1819年11月3日アルニムに次のような手紙を書いている。「近頃読んだ小さな物語、すなわち *Die Majoratsherren* の中にも、奇妙で不自然な成行がみられます。それがあなたにそなわっている真の生き生きしたポエジーを気紛れに駆り立て、そして損ねています。」⁵⁾ これはそれでも遠慮がちな表現であるが、同じ日にザヴィニ (Friedrich Karl von Savigny 1779-1861) に対して、彼はもっと率直な批評をもらしている。

「アルニムの最近の著作つまり *Die Gleichen* と *Die Majoratsherren* をお読みにになりましたか。彼の構想は不自然で、ほとんど罪深く錯綜し

ているので、豊かなポエジーというこの上なくすばらしい彼の才能が、その中で消滅しています。けれども私は彼が変わるだろうとは思いません。というのも、彼が今までに書いたものはみな、同じ過ちに苦しんでいるからです。ある時は、彼はまるで、物語の順序立った経過を可能にするのに必要な努力を払わないかのような、またある時は、まるで彼が無秩序のひそかな楽しみを抑え切れないかのような、そんな気がします。』⁶⁾

当時の教養ある読者一般が、ブレンターノ (Clemens Brentano 1778-1842) とともに *Des Knaben Wunderhorn* (第一巻1806, 第二巻・第三巻1808) の編者であるアルニムに抱いていた期待と、その裏切られた落胆の思いを、この手紙は代弁している。

かつて1812年に、グリム兄弟への献辞をつけて出された *Isabella von Ägypten* を含む、ノヴェレ集が、また1817年の *Die Kronenwächter* 第一巻が、友人達の間まきおこした、非常に活発な報告や質問や論議はもうみられない。アルニムはその後手紙の中でも、自分の文学上の仕事に関しては、ほんのわずかしき言及しなくなった。このヤーコプ・グリムの見放したような口吻が示しているように、友人達の間で、認められたり称讃されたりすることが少なくなると、アルニムは彼自身でも、友人達に自分の作品を理解してもらうことをもう諦めたようなところがある。Hitzig の *Gelehrtes Berlin* のために、アルニムが1825年に自分で書いた伝記のメモに、彼は *Die Majoratsherren* の標題すら挙げていない。そこでは「*Taschenbuch zum geselligen Vergnügen* の何年かにわたってノヴェレ8篇」とあっさりまとめられてしまっている (Vgl. Migge 1965, S. 756)。アルニムにとってこれは、大事な作品でも気に入った作品でもなかったのだろうか。

その頃アルニムはヴィーパースドルフ (Wiepersdorf) の祖母譲りの農場に引きこもって、生活のためにも、地主貴族として領地経営に励み、すでに5年ほど経っていた。領主の仕事はそれ自体苦勞の多いものである上に、アルニムにとっては更に、詩作にうちこめない苛立ちがあった。そこへ届いた友人のこの批判にアルニムは、彼には珍しくつらさを滲ませて11月11日返事を書く。(Steig 1904, S. 452 f.)

「あなたのお手紙は、まさにちょうどよい時に私に届きました」と始まるのであるが、それは皮肉であることがすぐわかる。経済的効率を考えて、蒸留酒製造所の器具をすっかり作り替えなければならなくなったのに、田舎には専門家がいないので、何もかも自分で工夫しなければならないとこぼして、「そして夕方もどつてくると、自分はこうやって自分の時間を失わねばならないのだ、という悲歎に襲われます。そんな時、あなたのお手紙を受取ったのです」と続く。これが詩人を喜ばせ励ましたのでないことははっきりしている。彼はむしろ開き直る。「本来は『成行の奇妙で不自然』ものを、友情がお許し下さったのですね。けれどもどんな人にも私の火酒を、奇妙で不自然だとはよばさせません。それに誰もそれを、私への愛情からということで受取ったりはしません。私の子供達は、私が育てた樹木をみつけてそれを喜び、そして父親の書いたものが手に入っても、恥じる必要はありません。」「奇妙で不自然」というヤーコブの評が相当にかちんと来たことがうかがえるが、アルニムは反論を避ける。「でも詩的がらくたはもう結構。私の作品は天国と共通の点があります。つまりほんのわずかの人々しかその中には入れないのです。」

このようにしてアルニムが、同時代の人々にはむしろ誇りをもって拒んだ、この作品に足を踏み入れることに、果して成功するかどうか、これはむずかしいという点からだけではなく、天国の門を叩くに似た、心そそられる試みである。

2

ヤーコブ・グリムの否定的な見解は先に紹介したが、彼はそれだけではなく、弟ヴィルヘルム (Wilhelm Grimm 1786-1859) がアルニムを弁解しようとするのが不満で、次のように答えた。「後世は彼の本をいっそう好まなくなるだろう。というのも彼らはそれをいっそう理解しないだろうから。」(Schoof 1953, S. 284) ベッカーズはこの言葉を引用して、「この断固たる判断で……ヤーコブ・グリムは *Die Majoratsherren* に関しては偽預言者だったことが明らかになった」⁷⁾ と言っている。しかしそれまでにはかなりの年月がかかったのである。

Die Majoratsherren を初めて本格的に論じたヘーネルは、この作品に特

別な研究を捧げることを正当化する理由を、次のように述べる。「これは真面目であっても機智のないものではなく、意味深長だがあいまいではなく、ロマン派的だが素朴ではないから。」(Henel 1960, S. 200), たしかにこの作品は、あらゆる時代や場所からの素材に満たされ、様々な観点が共存し、複雑に入り組み、相互に影響を及ぼし合う密度の高いものであり、一読しただけでは、ごたまぜの印象を受けるのも無理はない。しかし詩人はそれらすべてを制御している。思いつきや逸脱はひとつもない。それ故これは解きほぐすことができる。

ヘーネルはこの中から5つの観点をとり出す。第一に、これは若い家督相続人と、彼がひとめで心惹かれた、ユダヤ人街に住む美しい娘エステル(Esther)、この二人それぞれの出自の秘密を、推理小説のように徐々に明らかにしていく、緊張をはらんだひとつの楽しい読み物である。第二に、非常に特徴的な4人の主要登場人物の性格描写がみられる。つまり、少尉あるいは従兄と老宮廷女官という一組の恋人と、第一で述べた若い二人に関してである。彼らはタイプとしてそれぞれが同類の変種であって、各組はたがいに相反している。しかし関係としては、対になったり交差したりして、たがいの運命を決定し合う。第三に、導入部とエピソードのしっかりとした枠組みで注意を促されているように、これは社会批判、特にアンシャン・レジーム批判である。それは登場人物達と、長子世襲相続権という制度そのものを、誇張して戯画的に描くことで果されている。第四に、唯心論者と唯物論者、換言すれば理想主義者と現実主義者を対立させ、それぞれの一面的であることを揶揄して、そこから真の人間と正しい生の道という結論を示している。第五は宗教的観点である。これを強調しているのは、全体からみれば脇役の人物と、副事件であるが、それは同時に若い二人の恋物語の結末ともなる部分で重要である。そこでアルニムは、ユダヤ教の犠牲においてキリスト教を主張している。

これ以外に *Die Majoratsherren* に関する研究テーマとしては、動物磁気学⁹⁾と夢遊病、アルニムの歴史観⁹⁾、彼の反ユダヤ主義と民俗学的なこと、語りの技法¹⁰⁾、グロテスク¹¹⁾などがみられる。フランスのシュールリアリズム運動の主唱者ブルトン(André Breton 1896-1966)が熱狂的にとり上げたことも、つけ加えられねばならない。(Vgl. Beckers 1980)

こう並べただけですでに、この作品を読んでいない人にとっては、要求される視点の余りの豊富さに、これが一体どのような話であるのか見当がつかず、さぞや長々とした物語であろうと思うかも知れない。しかしこれはレクナム文庫でわずか54ページの作品である。主人公といってもよい若い世襲相続人にかかわる中心事件は、彼の登場から死まで、たった4晩で終わってしまう。その演じられる場所も、大部分は彼の部屋とエステルの部屋、そして女官の部屋の3か所に過ぎない。しかも毎晩ほとんど同じことが少しずつのヴァリエーションで繰り返されるような印象を受ける。前史は実に要領よく、誰かの報告という形で何回かにわたって間にはめこまれる。その構図もきわめて単純である。30年前に60歳と30歳と0歳だった人々が、ひそかにある事件を起こした。その結果はそのまま30年間続いていたが、いま故人と60歳と30歳になったその人達が、またたく間に過去の精算を果すのである。

このような充溢と単純化の絶妙なバランスが、緊密さを生み出している。そしてヘーネルもいうように、アルニムの芸術は分析的観察にとどまるのではなく、それを再び結び合わせた時に魅力的となる。個々の平面はそれぞれにたどることができ、理解可能で、そして全体のからみは詩的で優美である。この軽やかなたわむれこそがロマン派のポエジーであろう。(Vgl. Henel 1960, S. 201 f.)

3

せっかくのポエジーをぶちこわして、無味乾燥な骨組みだけにしてしまう愚は承知しているが、この作品が日本ではほとんど知られていないことを考慮して、便宜のために話の梗概を紹介することにする。

ある大きな都市に某氏の広大な世襲屋敷がある。今から30年前、当時60歳であった当主には子供が無かった。長子相続制度のもとで、もし彼が死ねば、正当な相続権をもつのは30歳の甥であった。しかし当主はこの男を嫌っていて、何とかして自分の子供に跡を継がせたいと考えた。そこで彼は若い女性を後妻に迎えた。期待通り子供が生れることになったが、もしそれが女の子だったら、というのが彼の次の不安であった。その頃一人の宮廷女官は、美男の恋人の子供をひそかにみごもっていた。当時少尉であ

ったかの甥は、彼女に横恋慕し、彼女を奪い合ってその恋人を刺し殺してしまった。女官は父無し子を生むスキャンダルを避けるためにも、恋人の仇である少尉の栄達を妨げるためにも、この機会を狡猾に利用し、一週間早く生れた自分の男の子を、言葉巧みに世襲屋敷に押し込んだ。そこに生れた女の子は、相当のお金をつけて、こっそりとユダヤ人の馬商人に養女にやられた。自分一人でこれらすべてを画策した老当主は、程なくあの世へ旅立った。少尉は、やっと自分の手に入りそうになっていたこの町随一の財産を、目の前でさらわれてしまったわけである。

それから30年、彼はあの決闘沙汰で出世の道を断たれ、いまだに少尉のままであるし、この屋敷の相続権に対しても、相変らず第一順位者として待つ身である。彼が上流社会で「従兄」と呼ばれることが、この家柄と彼とのつながりを示す、彼に残された唯一の名誉である。女官は恋人を殺された復讐心から、少尉に決して承諾は与えないが、彼を自分の魅力につなぎとめたままである。高く結い上げた髪と、紅白粉とつけばくろが、彼女の外観を昔のままに保っている。若い相続人は母親と外国で暮し、一度もこの立派な館に住んだことはなかった。しかし館は財団の様々な規則の定める通り、何百年来変ることなく、毎年一定額の銀の食器やリネンやワインを購入し、土曜日には集まる貧しい人に施しを続けている。長子相続の法律に従って一文の分け前にもあずかれなかった従兄は、様々の怪し気な取り引きで、何とか生き延びて来た。そしてユダヤ人街に接する一番惨めな地域に家をもった。

ある春の日曜日、世襲屋敷の主がこの都市に帰って来る。彼を愛し、かばっていた母親が亡くなり、彼は実務をさばくのが苦手で、そのため熱病にかかって健康をそこねた。そして、この町で安らぎが得られるだろうという預言に従って、来たのである。しかし彼は自分の世襲屋敷を嫌って、従兄の許に住まわせてもらうことにする。ユダヤ人街に面した窓から彼は向かいの窓の中に、美しいエステルを認め、たちまち恋におち入る。彼女は彼のいとしい母親に瓜二つであった。エステルが、継母であるユダヤ女ファスティに財産を狙われ、いじめられていると聞くと、彼のやさしい気持はいっそうつのる。エステルは夜になると空想を駆って、お客を招んでお茶の会をしたり、仮装舞踏会を催したりする。世襲相続人には透視力が

あり、のぞき見をする彼にも、エステルは幻想がまざまざと見える。エステルこそが世襲屋敷の本当の子供であり、彼女は本来自分の送るはずであった生活を、こういう形でとりもどしている。彼女は自分の素性を知っているが、ユダヤ人の世界から抜け出す方法はない。

世襲相続人は、やがて彼女と自分の出生の秘密を知り、エステルのために何かしたいと願うが、彼には行動力が欠けていて、彼の決断はいつも遅い。彼は女官と母子の対面をする。女官は自分の復讐がすべてうまく行って、息子がこの上なく輝かしい運命にまで高められ、少尉の方は、路地裏の餓鬼共にも嘲笑の的の老いぼれになっていることに、満足している。しかし息子はこの女性に嫌悪の情をおぼえる。エステルは婚約者がすっかり落ちぶれて戻って来る。彼女は経済的に彼を救うために、彼と(形だけの)結婚をする、と宣言する。ファスティは激怒する。従兄が上機嫌で、女官がついに自分の30年来の求婚を受け入れてくれたと報告する。条件として、世襲相続人を可愛い息子としてそばに置き、二人の老後の支えとすることを、彼は義務づけられたという。そして彼は世襲相続人の後見人気取りでいる。

エステルは結婚式の直前に死ぬ。だが世襲相続人は、ファスティが、まだ息の残っているエステルを絞め殺したのを目撃する。それを証言するために、彼は彼女の枕許にあった杯の水を飲み、自分も倒れる。従兄の呼んだ医者への処置は、彼の死を早めたただけであった。つまりエステルと世襲相続人の状況は全く同じである。二人は「私があなただ、あなたが私」(51)なのであるから、当然交替可能である。エステルは、幻想に逃れるのを止め、出口のない自分の運命を受け入れてユダヤ人の妻となる、まさにその決心をした時に、財産ゆえにかねてから彼女の命を狙っていたファスティによって、殺される。世襲相続人も、現実に身を委せて「世襲屋敷に住み社交界に顔を出し宮廷での出世を試めしてみよう」(60)と思い決めたまさにその直後に、長年ただ彼の死ぬのを待っていた従兄によって、命を絶たれる。

そして従兄はその夜のうちに、世襲屋敷に移り住む。世間の評判はたちまち変わり、彼は将軍にまで出世して、最高の富と名誉のうちに女官を妻に迎える。しかし彼女の目的は徹頭徹尾復讐であり、彼の人間としての品位

は最低にまでおとしめられる。やがて秘密は人の知るところとなり、世襲屋敷は世間と隔絶し、そのうち中の住人は死に絶え、時代も変る。外国人が支配し、封建制度の長子世襲相続法は廃され、ユダヤ人街は解放される。かの世襲屋敷は今ではファスティの工場になっている。封建法によってかわって信用が登場した。

4

この作品を解釈するために種々の切り口が可能であること、ヘーネルが一般的に詳細な研究を行っていることは、すでに述べた。今それにつけ加えるささやかな試みとして、*Die Majoratsherren* という標題を中心に考えてみたい。一つの平面を設定するために、たくさんの魅力的なモチーフを切り捨て、全体としてのポエジーを犠牲にしなければならないのは、大変残念なことではあるが、それは小論では仕方のないことである。

さてこの試みの手掛りとなるのは、登場人物達の呼び名である。この中で個人の名前を与えられているのは三人の女性、つまりエステル、ファスティそして家政婦のウルズラだけである。あとは先代の世襲相続人と今の相続人、彼の母親と彼の従兄、宮廷女官という風に、すべてその役割で呼ばれている。エステルとファスティという名前は、旧約聖書のエステル記からとられているので、これもまた彼女らの個人としての名前である以上に、旧約聖書の人物のイメージを引きずっている。その中でファスティ (Vasthi, Vashti) ヘブライ語ではワシテ又はワシュティと読むようである) は、ペルシア王アハシュエロス (Ahasveros) の美しい妃であるが、饗応の時、王の客達の前に現われることを拒んだため、命令に従わなかった咎で離縁される。そのあと王は、国中の美しいおとめを集めて妃選びをしたが、最も美しく最も気に入ったのが、ユダヤ人の女エステルである。エステルは初め自分の属する民族を隠していたが、妃になってから王を動かして、ユダヤ人を迫害から守った。エステルとファスティの、ユダヤ人非ユダヤ人の関係がこの物語では逆になる。そしてアルニムはファスティを、ユダヤ人の典型として形成している。彼女はこの物語の他のどの人物よりも長く生きる。革命を生き延び、不穏な時代をも生き延びる。この時期には「年とった人々はもはや全くついて行くことができず、それ故気付

かれることなく死に絶えた」(67)というのに、彼女はうまく時代の波に乗り、金もうけをする。ファスティがアハシュエロスの妃であることで、この名前で、あの永遠に放浪する運命を背負わされたユダヤ人 Ahasver¹²⁾のことを、アルニムは考えていたのであろう、とヘーネルはいう。ファスティは死ぬことができない。いつまでも生き続け罪を重ねる。(Vgl. Henel 1960, S. 218)

家政婦ウルズラ (Ursula) は、「誠実な魂の持主」(35)「すばらしい魂の持主」(42) と呼ばれるが、元イギリスの王女で殉教の聖女ウルズラの名前をもっている。世襲相続人には、彼女の頭をとりまく白い頭巾が、聖者の輪光に見える。

名前をもつことが、その持主の個としての人格を意味するわけではない。極端な例が、カルトッシュ (Kartusch) である。フランスの稀代の盗賊の頭にちなんで名づけられているのは女官の愛犬で、その命名日に寄せた詩を朗読するよう、彼女は夫となった將軍に乞う、という侮辱を加える。これは名前全般に対する否定の行為である。固有名詞を書いた方が自然な所には、「大都市……に」(33)「……氏の」(33)「美男の……」(53)という風に、アルニムはあえて何も書かない道をとる。つまりこの作品の中では、すべての人物が個としての名前をもたず、その属性や役割によって呼ばれ、それに従った言動をしている。「人間達はまるで子供のおもちゃのように糸でぶら下っていて、そして偉大な日輪の廻転が命じるままに動いているように、彼には思えた。」(46)

5

言うまでもなく操られて演じる役割の最たるものが、標題の「長子相続財産の所有者」である。しかしここでは die Majoratsherren と複数形になっている。それ故これは、一見主人公のように思えるあの30歳の相続人一人の物語ではない。ここには何人かの世襲相続人達が登場する。その前提としてまず、何百年来周囲を威圧するようにどっかと存在する世襲屋敷がある。それは誰も目のそば立たせ、古くはあるが依然としてこの都市の特別に目を惹く名所で、「恐ろしく大きな人間の箱」(52)である。この館を30年前まで所有していたのが先代の主人、次に当主、そしてこの物

語の終の方では従兄が相続人となり、ついにはファスティが、相続によらない売買での所有者になる。他の人物達もどれかの世襲相続人の妻、娘、生みの母という風に、すべて世襲相続人達とのかかわりにおける役割を担っている。

一方この館とは無関係に、「ユダヤ教徒の長子相続者達」(43)というものも配されている。それらは動物の初子つまり長子である。そしてこの物語はこれら何人かの長子相続人達が、その立場の故にたどることになった運命の諸相を描いたものである。エステル之言によれば、「ひとり自分の名前の名望を保とうとする男性の虚栄」(52)も根底にあるのであろう。男性の登場人物は、誰一人名前を与えられておらず、家名を重んずるあまり、個の名前を失っている状況が、ここにも象徴的に表わされている。

「そもそも長子相続権はほとんど祝福をもたらさないように見えた。というのも、富めるその所有者は自分の富を喜ぶことはめったになかったし、一方非所有者は羨望のまなこで彼らを仰ぎ見ていたからである」(34)と語り手は前置きする。これらの不幸な世襲相続人達を順番に見て行きたい。

まず先代の相続人、彼は過去の人間であるから、彼のことはすべて間接的に誰かの口を通して語られる。従ってその際話し手の主観がまじる恐れがあるが、それにもかかわらず彼の人間像は一定である。青年相続人はこの都市に初めて入った時、なおざりにされた訴訟のために、大裁判所の役人達の上着を掴んで、むりやり引きもどそうとする不幸な霊たち(現実には彼らの子供)を、彼の心眼で見るが、その霊の中には、永久に結着がつきそうもないある破産訴訟をかかえた、自分の父親の霊もあった。父親の霊がその財産ゆえに安らかに眠っていないことを、彼は知っている。エステルは自分が犠牲者でありながら、実の父親のとった行為に理解を示す。

「世襲屋敷の老主人は、従兄つまり少尉に、何度も面白くない思いをさせられたので、その大事なお宝は自身の息子に譲りたいと考えました。一体その頑固さがあなたにとってそんなに不思議でしょうか……つまりあなたがお母様の胸にゆだねられたのです。ちょうどナイチンゲールもカッコウの卵をかえすように、でももちろん、それで何か悪く言おうとしているのではございません。」(51 f.) 財団の規定によれば、実子であっても女の子の取り分は少ない。父親はそれより多い額をつけて彼女を養女に出した。

しかし秘密を守るためにユダヤ人養父が受取った金額は、その3倍もあったろう。愛情も信義もお金に置き換えられたのである。しかし従兄によれば、先代は余分な支出はびた一文する気がなかった。そして彼がぎりぎりのその日暮しをしていた時に、立替えた仕立て屋の勘定を期日に返却しなかったといって、彼を訴え出たことがあったという。これを聞く当主は叫ぶ「何と、それは厳しい。それでは相続人に祝福のあるはずがない！」

(53)

先代が肉親の情を殺し亡者と化して守り伝えた財産は、それを相続する人には初めから重荷であり呪いである。彼は内面世界に没入して、見かけは生きていても、この世の営みに関しては死者であることを自覚している。財産管理にエネルギーを使うことは、彼にとっては「より高いものをより低いものの犠牲にする」(39) ことである。「おお従兄よ、お金と財産の重荷を私から取り除いて下さい。そしてこの富はあなたが楽しんで下さい。私にはほとんど必要ないのです」(40) と彼は涙を浮べて助けを求める。彼が常に現実よりも「より高い世界」を志向し、目の前の物を「第二の両眼」で見てしまうことで、現実主義者の従兄の覚めた目で見たまのとの間に、こっけいな食い違いが生ずる例は枚挙にいとまがない。彼の聴覚もまた実際に鋭敏であるだけでなく、超現実的でもある。エステル毎晩の幻覚のきっかけとなる、恋人が自殺した時の夜中の銃声は、エステルだけの幻聴ではあるが、世襲相続人ははっきりとそれを聞く。従兄が自分のフランス貴族の紋章のコレクションの引出しを開いたとたん「これはまあ、何という騒音だ！」(41) と相続人はとび上る。彼には、やがて貴族達を襲うフランス革命の騒ぎが聞こえ、そして見える。

「より高い魂の状態」(43) から現実に覚醒することは、彼の「霊の物理学」¹³⁾ (41) によれば「核から殻へ落ちもどる」(43) ことになる。昼間は眠って、夜に静かに自分の仕事に励む彼の習性は、生きながら生に背を向けることである。自分と共に一度女官を訪ねてほしい、と従兄に求められると、彼は答える。「そのためには私は一日生きなければならない、自分の日々を眠って過ごす方が、私にはずっと好ましいのだが。」(45) 彼は自分の置かれた現実を見ないようにし、責任を回避し、生そのものを傍らで通り過ぎさせようとしている。まともな世襲財産相続人であるための様

々な仕事を、父親があくどく果したこと、母親が「非常な分別と秩序をもつて」(39)行ったことを彼は知っている。そして従兄ならこの財産を3倍にもするであろうことも解っている。だがその義務感には彼に被害者意識を植えつけるだけで、彼を萎縮させてしまう。彼にとっての人生の重要な仕事は、出来るだけ忠実に日記をつけることである。

しかし彼が投機や取引きなどのかわりに、ほしいままに没頭して身につけた学問や芸術、つまり彼の抛り所は、実はエステル犠牲において、盗人として自分が得た財力のお陰であったことが明らかになる。「罪の重荷である富など失くなってしまえ！ それは私を仕合わせにしてくれたことなど一度もなかった！」(55) 世襲財産は義務の重荷であるにとどまらず、罪の重荷として彼を押し潰そうとする。

この物語の語り手は初めは客観的な立場を保っているが、次第に世襲相続人に同化していき、ほとんど彼の目で見たとしか書かなくなる。従って読者もまた彼の目で見ることになり慣らされ、彼の価値観を共有しそうになる。つまり、より高いもの＝より内面的なもの＝非現実的なもの、が真実だという考え方である。過って階下の七面鳥の群の中にとびこみ、あわてて駆け上った屋根裏で白い鳩をまわりに見出して、地獄から天国に昇ったように感じている世襲相続人に、従兄が「現実」の化身として、とがったナイトキャップと赤い鼻をもって立ち現れる時、それはほとんど七面鳥そのもので、つまり地獄からの使者である。たしかにこの従兄とのコントラストで、彼の精神性が強調されているのであるが、その極端な非行動性は、従兄の徹底した現実性と同様に、充分茶化されてもいる。彼が意を決して、ついにエステルの許に駆けつけようと行動を起した結果が、この鳥類の騒ぎで、その不器用さに読者は笑わずにはいられない。又天国の平和の象徴である鳩にとり囲まれていると、自分は天国に近づいている、この世では自分はもう必要はないのだ、という予感に満たされ、せっかく芽生えたエステルの為の行動性も、たちまちにしばんでしまう。そして彼は自分が、自分なのかそれとももう自分の霊なのか解らない。エステルが痙攣を起して、一人放置されているのを知る読者にとって、これはいささかはがゆいことである。彼に実際的な能力がないのは仕方がないとしても、彼の透視力すらエステルの運命には何の役にも立たない。エステルには「私たちの

恋はこの世のものではない」(52)と初めから解っている。しかし世襲相続人は、燕の巣作りにいつとき自分の地上的な幸福を賭けてみたり、「すべての病人や苦しんでいる人間と同様に、自分の生命をいとおしく思い」(60)忌み嫌ったはずの生みの母親が、考え出した解決策を受け入れもする。「あの方は私のために何かして下さる前に、いつだって決断がつかずにあれこれお考えになるのが長過ぎるのです」(56)とエステルは嘆いているのに、世襲相続人は女官に約束させられて、24時間何の決断もしなくてすむことが嬉しい。余りにも長く続き巨大化し、それ自体の意志で運営されているような世襲相続制の下では、相続人の個人としての活動の余地はほとんどない。彼はあらゆることに関して受動的な観客に徹し、舞台上上ることを考えない。「彼は自分自身が登場するのを恐れた。彼にはまるで自分が手袋を脱ぐ時のように、ひとりでに裏返しになるかのように思えた。」(50 f.) 観察者が同時に被観察者になるおぞましさである。またエステルの死の場面が完全に終わった時になってやっと彼は「この世では、自分が見たすべてのことにも、何か現実的なことがあり得るのだということに」(64)思い至る。そして彼が終に果した思い切った跳躍、つまり現実への関与は「無意識のうちに」(64)なされたのであった。

これもまた先代とは対極的な意味で、長子相続財産によって破壊された人格である。彼は導入部に言われている「より高い世界に近づくのを急ぎ過ぎ、半ばペールを脱いだその世界の輝きに目がくらみ、犯罪的に自己を滅ぼして、薄明の未来に押しやられ」(33)てしまった人種の一人である。あるいは「霊を見る人間は、長年の熟慮によって、彼に現われるその霊よりも、いっそうの心構えが出来ていなければならない。さもないと両者は互いに相手に驚き、その時、死ぬべき定めをもつ人間の側がもちこたえられなくなる」(39)と知っていながら、霊と交わり過ぎた人間である。

次の相続人である従兄は、その富を享受する術を知っており、富は名誉を伴い、恋は成就する。彼は目もくらむような現実界の頂点に昇りつめる。この世襲屋敷では何百年来執事が財団の規則に従って、すべての時計のねじを巻いて来た。そして従兄もこの屋敷の外で、歩く標準時計として町中に知られていた。過度の時間厳守癖は保守性の現われであり、秩序の奴隷であることを示す。彼の大事なコレクションが紋章であることも、彼が古

い制度と権威にしがみついていることを示している。彼は「恋愛物語より訴訟沙汰の方が好き」で「何かそういったものを進めていないと仕合わせではない。」(40) その上彼は冷血漢で、人の死ぬことを何とも思わない。

このように彼は、世襲屋敷の外で相続を待つ間に、すでに立派にその相続人たる資格を有していた。彼ならば、世襲領に押し潰されることはなかったかも知れない。しかし妻となった女官が、屋敷の中の価値体系をすべて破壊してしまった。そこは犬と霊とが君臨する無秩序の世界になってしまったのである。青年相続人の幻視癖に、いつも明快な具体的解説を加えてきたその従兄が、女官に「見霊者」(66)と馬鹿にされるくだりは、規準の転覆を痛烈な形で表現している。外国人将校の秩序回復の試みも、激しいいさかいを惹き起しただけである。世襲領制度そのものが、内部からも外部からも崩壊してしまった。世襲のダマスク織のナブキンについている大きな紋章で、犬が汚い前足を拭う光景は象徴的である。しかし建物は残っている。そして次に「始まった新しい時代は、沈んで行った時代と同じ法則の下に支配されている。」¹⁴⁾ 老ファスティがこれを塩化アンモン石工場にし、附近の人はそれを不愉快ではあるが、大変有用だと認めるのである。アルニムは来るべき重商主義、資本主義を予感し、封建主義と同様に批判している。

次に動物の世界ではどうであろうか。「大きな長子相続権を形成する際には、あとから生れた者達の子孫は完全に忘れ去られる」(34) ことになるこの制度を、従兄は猫の世界にたとえる。「我々の高貴な家系では、残念ながら猫達と同じことで、一匹の子猫が初子として充分に餌を与えて育てられ、他の若い弟達は水に投げこまれる、というわけなのです。」(37)

「ユダヤ人の初子」がこれに当る。ユダヤ人墓地に恐ろしく大きく太った雄牛と雄山羊がいる。「それは彼らの掟の命により主に捧げられる動物の初子で、ここで充分に餌を与えられているが何もしなくてもよい。」(43 f)

旧約聖書出エジプト記によると、モーセは主の言葉を次のように民に説明する。「主は、力強い御手をもって我々を奴隸の家、エジプトから導き出された。ファラオがかたくなで、我々を去らせなかったため、主はエジプトの国中の初子を、人の初子から家畜の初子まで、ことごとく撃たれた。それゆえわたしは、初めに胎を聞く雄をすべて主に犠牲としてささげ、ま

た、自分の息子のうち初子は、必ず贖うのである。」(13: 14-15) イスラエルにおいて初子を神にささげることは、次のような形で行われた。「聖別、すなわち動物の初子を次の出産まで仕事につかせず、用いないこと(申命記 15: 19)あるいは聖所に奉献して祭司の用に供すること」¹⁵⁾などである。これはウルズラのした説明と一致する。彼らにとって初子、すなわち長子は、動物でも人間でも特別な価値があった。従って財産相続に関しても長子は優遇され、申命記 21: 17 には長子権 (*der Erstgeburt Recht*) が明記されている。しかしそれによると、他の兄弟たちの二倍の分け前が与えられるということで、『新聖書大辞典』には「すべての他の兄弟たちを除外してひとりの息子のみとその父の財産を受け継ぐことは許されなかった」¹⁶⁾とわざわざ書いてある。これはドイツの封建制度のひとつとしての、長子のみの世襲相続権とは少し異なるところで、*Majorat* はユダヤの家畜の初子の方に似通っている。

世襲相続人が昇りゆく月光の中に見た、墓場で騒ぐ「ユダヤ人の初子」は、肥大し過ぎグロテスクで、彼ら自身がその存在を不思議に思っているようであった。それらは労働をせず、聖なるものとして、実際の役には用いられないことで精神性を獲得し、預言的な行動をする。しかしそれらを大切にしているはずのユダヤ人にとっても、実は厄介者であって、自ら手を下すことなく、異教徒であるキリスト教徒が打ち殺しでもしてくれれば、出費が助かり内心大いに有難いということである。ここに描かれている「ユダヤ人の初子」は、その記述の一つ一つが、ドイツ人の長子世襲相続の財産、制度、相続人の戯画になっている。「不仕合わせな初子たち」(44)と世襲相続人はひそかに溜息をもらす。彼は我が身にひきくらべずにはいられない。

死にのぞんで世襲相続人はキリスト教徒として天に救いを求める。キリスト教は初子を特別扱いしない。「私も私の天国を、安らぎを、そして不動の永遠の青さを見出すだろう、その青さが無限の広がりの中で、一番年下のこの私を、初子達と同様に、みな同じ至福のうちに迎えてくれるのだ！」(64) 世襲相続から解放されて人間性を回復するためには、自分が不正な相続人であるという罪を認めなければならない。それは死を意味するであろう。しかし、この世では青ざめていた (*bleich*) 彼も、天国では

生命を、幸福を得られるであろう。同じく青ざめていたエステルも、死によってユダヤ教から逃れ、天国で待っているであろう。

6

以上この物語を、長子世襲相続という面から見直してみたが、アルニム自身の相続領に関して、その事実関係を伝記的にたどってみることも、無駄ではないように思える。

アルニムは父親の側では、15世紀来ブランデンブルクの、のちにはブランデンブルク＝プロイセンの、歴史上有名な貴族の家柄である。母方の祖母は領地持ちの商人の出であるが、最初の結婚で、亡夫が王からもらっていたツェルニコフ (Zernikow) の領地を相続した。母方の祖父も元は市民の出であるが、プロイセンの宮廷で羽振りを利かせ、男爵位を手に入れた。しかし奇行の多い人であった。彼等の娘は Carl Joachim Friedrich Ludwig つまり Achim を1781年1月26日に出産し、それがもて3週間後に他界した。アヒムは2歳年上の兄と共に、祖母に引き取られた。父はプロイセンの外交官、のちにベルリンの宮廷オペラの劇場支配人になったりした人であるが、以後息子達への関与は全くといってよいほど無い。アルニムから父への手紙は常に返事のないままだったようである。

幼い二人の男の子を育て上げた唯一の人が、もう未亡人になっていた50歳の祖母である。しかしこの祖母は、生来頑固で意地っぱりで实际的、しかも自分の領地の経営にすっかり打ち込んでいた。彼女は夫が亡くなってから、儉約と事業センスを駆使して、負債があったにもかかわらず、4年後にはヴィーパースドルフの館を含む Bärwalde を手に入れた。この領地は娘の持参金に定められたものであった。祖母と二人の孫は、冬はベルリンに住み、夏はツェルニコフで過ごした。しかし家庭的な暖かさには欠けていた。祖母は強い人で馬の乗り方も男性のようである、とアルニムは回想している。(Steig Bd. 1 1984, S. 5) 彼女は芸術、そして孫ののちの文学活動にはほとんど理解をもたなかった。彼女の関心事は、自分と家族とを社会的に認めさせるために、王宮につながる関係を育て上げることであった。ザイデルは彼女のことを「プロイセン貴族婦人に生れついたのではないが、当然プロイセン貴族婦人と呼べる」¹⁷⁾ 人だったと推測される、と

言っている。

父以上に二人の子供の教育や健康を気にかけたのが亡き母の弟、のちの Graf Schlitz である。アルニムが彼に宛てた好意のこもった手紙には、学校や旅行での経験がこまごまとつづられている。「アルニムの人生への態度は多くの点でこの叔父が刻みつけた。たとえば農業や園芸の仕事への愛情、不愉快な気持や怒りをこの種の活動で忘れる習慣などである」¹⁸⁾ とライリは特に彼の名を挙げているが、アルニムは生れつきこのような気質をもっていた、と一般に言われている。一方ギュムナジウムでの知的関心の強さはすぐれていて、校長は、彼の勤勉ぶりをうっかり褒めて、これ以上彼が勉学に励んだら健康を害ねる、と心配したほどである。

アルニムの父は先祖からの物に加えて、自分で購入した Schloß Friedenfelde¹⁹⁾や領地も持ち、結婚した頃は周到にその世話をしていた。しかし1803年暮彼が死んだ時、アルニム兄弟が期待していた程には財産の無いことが判明した。国家に職を得ようとアルニムは繰り返し試みたが、どれもうまくはいかなかった。1810年3月10日祖母はベルリンの家で亡くなった。苦悩、いさかい、強制、不安の詰っているこの家は、小さい時から住み慣れている彼にすら、一時間と耐えられない所であった。それ故彼は、祖母が病床に就いたためベルリンに来たのに、宿は別の所に構えた。アルニムはその頃親友ブレンターノの妹ベッティーナ (Bettina Brentano 1785-1859) と親しんではいたが、とうとう彼女を祖母に紹介することはしなかった。反対されることが目に見えていたからである。祖母の遺言状によると、彼女の所有地には Fideikommiß²⁰⁾ (信託遺贈) が設定されていて、それは彼が子供をもった時初めて解けるようになっていた²¹⁾。それ故彼は合法的に子供を得るための自分の義務を果そうと決心したのだ、とベッティーナに書き送り求婚した。婚約はその年のクリスマス、そして結婚は1811年3月11日、つまり祖母のための一年間の喪が明けたその翌日である。アルニム30歳、ベッティーナ25歳であった。次々と子供が生れた。経済的な問題、ベルリンの表面的な社交生活への嫌悪、政治的情况に精力的に関与することは不可能と知る落胆、こういうことからヴィーバースドルフへの移住が望ましくなった。それは1814年2月に実行された。以後彼は名実ともに、世襲領主の生活を送ったのである。

アルニムが詩人と世襲領主との二重生活をどのように受けとめていたかを断定することはむずかしい。ライリ (Riley 1979, S. 92) は、アルニムは田舎の生活を少くとも最初は、喜びとしてよりもむしろ義務と受け取っていたとして、いくつかの手紙を引用する。そこからは、運命により自分にまかされた農場経営を、何とかうまく建て直して、子供達に引き継ぎたいと努力を続けるが、それでもうまく行かない様子がうかがえる。ところがザイデルによれば「この所有地への責任関係に、詩人アルニムは、芸術におけるよりも又ドイツ国民への奉仕におけるよりも、より多くの天職を認めた。」(Seidel 1944, S. 218 f.) そして初期のアルニムを、夢遊病者と、若い貴族としてのめざめた昼間の意識との魅力的な混合物と考える。そして彼の身分的な責任感が、彼の芸術的發展をおびやかすのではないかという危険を、友人ブレンターノは早くから見通していたのに、アルニム自身は自己の本質が制約を受けていることを、ぼんやりとしか意識していなかった。自分に生れついていたプロイセン的義務感という前提が、彼には非常に強かったので、自分にころがりこんだこの生活形態と、自分の才能との間に生ずる葛藤の決着を、きっぱりと果そうと決断したことは一度もなく、彼はこれを義務と愛好の全般的な調和の問題と考えていた。

しかし彼の生活の諸条件は、もはや変更し難く彼にこの生活を強いる。溢れるほど豊かな詩的幻想と天分を、如何にしてこの強制に屈しさせて、さすらいの詩人から、机に向かう時間をひねり出すのにも苦勞するヴィーバースドルフの領主になったか、このことは友人達への手紙の行間に、抑えつけたモノローグのようではあっても、やはり見過し難く読みとることができる。しかし一方アルニムは家庭から、畑から、領民から多くの喜びを得、田園生活により、内面世界への沈潜を深めることもできた。

アルニムがフランス革命に対しては好意的な評価をしていないことは、*Die Majoratsherren* からも読みとれるが、プロイセン貴族の腐敗には憤りを感じていた。彼は伝統的秩序の中の貴族という制度を非常に疑い深く見ていて「あらゆる生れつきの身分の撤廃を主張した。」(Hahn 1981, S. XV) 貴族を身分としてではなく、心情として理解し、民衆が高貴になることで

平等を達成しようと考えたのである。彼が理想とする「高貴な」貴族とは、生れつき彼らに割り当てられた特権を、個人的な利害に用いるのではなく、民衆の経済的・精神的福祉のために無条件に働く義務、と心得る人のことである。ヴィーパースドルフの領主貴族としてアルニムは、ある程度は自分の理想郷を実現していた、少くともそう努力していた、と考えられる。

それにもかかわらず、*Die Majoratsherren* の中で、相続人としての義務に背を向け、「より高い世界」のみを見ようとするあの青年は、一面においてアルニムの仮想の願望ではないだろうか。青年が住もうとしない「その大きな石は飢と心痛でつなぎ築かれたように見える」（53）あの世襲屋敷には、ベルリンの祖母の家の、決して我が家というなつかしさを覚えることのできない、暗く厳格な幼年時代の想い出が、重っているのではないだろうか。宮廷で隠然たる勢力をふるい、「あなたの息子は苦しんでいます」という訴えに、「お前の母は上機嫌だ」（53）と平然と答える女官は、彼の祖母の面影を映してはいないであろうか。硬直した制度は弊害のみ多いという批判の中に、身分の義務の重さにあえぐアルニムの、個人的なうめきが聞えないであろうか。出来ることならアルニムは、あれほどまでに幻想に耽溺したかったのかも知れない。しかし彼は決してそんなことを自分に許さない。青年世襲相続人の描き方は一見肯定的であるかに見えて、その実、この世界での無能者として笑い者になっていることは、すでに述べた。そのようにして、彼は自分をいましめたのではないだろうか。

理想主義者も現実主義者も、どちらも容認はされない。しかし中道である、人間の正しい生の道の実現は容易ではない。ひばりのいたずらな飛翔に對置された、つばめのいじらしい営巢には、何の保証も与えられない。しかしそれを繰り返すことが生きることである。「ここに自分の家を築くとは／何と甘美で愚かな考えか。」（44）ザイデルの言を借りれば『額の汗の中に——パンと知恵が生れるということ』これがロマン派詩人アルニムの、究極的なきびしい認識である。（Seidel 1944, S. 259 f.）更に彼女は「自分の道の変えようの無さに甘んじ、その道を快活な勇敢さで歩み切った一人の男の落ち着いた態度」について述べている。同時代人は、アルニムのこのような精神と生活態度の、古典的ともいえる Form と、彼の常に「美丈夫」と評される外観の Form に幻惑されて、彼の作品の方は

formlos としか見ることができず、その不整合性にとまどった。彼の作品のいわゆる「無形式性」についてここで論じる余裕はない。しかしアルニムの精神は、一般に考えられている以上に、作品によってバランスを保っていたのではないかと考えられる。妻ベッティーナに宛てた次のような手紙が残されている。

「私はペーリッツの家にいました。そして私の財産をむしばんだ不幸のすべてを、彼といろいろ考えました。するとその時苦々しい悲哀が私の目に浮びました。子供達はいつか私に腹を立てるだろう、私は農場の経営をこれよりうまくは出来なかったのだ、一方私は幾日も幾日も節約をしたのに、と。その時私は、これらすべてを物語に書いて残すことを計画しました。この世では如何に何もかもが破滅的になるのか、しっかりした男達の賢さや忠告が如何に、ほとんど一度も私の助けにはならなかったか、ということ。」²²⁾

テキスト

Arnim, Achim von: *Sämtliche Romane und Erzählungen*. Hg. von Migge, Walther, München 1965, Bd. 3, S. 31-67.

本文中、テキストからの引用は、そのページ数を（ ）で示した。

注

- 1) Vgl. Henel, Heinrich: *Arnims „Majoratsherren“ mit dem Nachtrag 1979*. In: *Goethezeit*. Ausgewählte Aufsätze von Heinrich Henel, Frankfurt a. M. 1980, S. 198-237. Zuerst erschienen in: *Weltbewohner und Weimaraner*, Zürich u. Stuttgart 1960.
- 2) Vgl. Hofmannsthal, Hugo von: *Deutsche Erzähler*. In: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*. Prosa 3, Frankfurt a. M. 1952, S. 105-113.

ホフマンスタールは1912年、ゲーテからシュティフターに至る20人の作家達の、特にすぐれた物語を一篇ずつ選んだ『ドイツの作家』という選集を編み、序文をつけた。その中で彼はアルニムを高く評価し、作品としては *Der*

- tolle Invalide auf dem Fort Ratonneau* (1818) をとり上げた。
- 3) Migge, Walther: „*Die Majoratsherren*“ *Zur Entstehungsgeschichte*. 上記テキスト S. 756-759, S. 756.
 - 4) Vgl. Werner, Hans-Georg: *Die Majoratsherren*. (Anmerkungen) In: Arnim, Ludwig Achim von: *Die Erzählungen und Romane*. Hg. von Werner, Hans-Georg, Leipzig 1981, S. 733-739. S. 733.
「今日一般に、彼の作品の中でも、もっとも諸関連に富み、そしてもっとも正確に細部まで完全に展開され切ったものの一つとみなされている」と評価の定着していることを示している。
 - 5) Steig, Reinhold: *Achim von Arnim und die ihm nahe standen*, Stuttgart und Berlin 1904, Bd. 3, Nachdruck Bern 1970, S. 451 f.
 - 6) Schoof, Wilhelm (Hg.): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny, aus dem Savignyschen Nachlaß*, Berlin u. Bielefeld 1953, S. 286.
 - 7) Beckers, Gustav: *Nachwort*. In: Arnim, Achim von: *Die Majoratsherren*. Erzählung, Stuttgart 1980, S. 55-77. S. 62. (レクラム文庫)
 - 8) z. B. Kluge, Gerhard: *Gotthilf Heinrich Schuberts Auffassung vom tierischen Magnetismus und Achim von Arnims Erzählung „Die Majoratsherren“*. In: *Aurora*. Jahrbuch der Eichendorff-Gesellschaft, Sigmaringen 1987, Bd. 46.
 - 9) 1987年冬学期ミュンヘン大学で Prof. Günter Häntzschel の Hauptseminar のテーマは Achim von Arnim であった。教授が示した *Die Majoratsherren* のテーマは次の通りである。
 1. Magnetismus und Somnambulismus als erzählerische Motive
 2. Arnims Geschichtsbild
 - 10) Rasch, Wolfdietrich: *Achim von Arnims Erzählkunst*. In: *Der Deutschunterricht*. Stuttgart 1955, H 2, S. 38-55.
 - 11) Kayser, Wolfgang: *Das Groteske. Seine Gestaltung in Malerei und Dichtung*, Oldenburg 1957.
 - 12) Ahasver はアルニムの *Halle und Jerusalem* (1809) にも形を変えて登場する。
 - 13) アルニムは17歳で (1798年5月) ハレ大学の法学部の学生となった。そして同時に数学と物理学の勉強もした。彼の最初の出版物は *Versuch einer Theorie der elektrischen Erscheinungen* (1799) であり、以後1807年まで

- Annalen der Physik* (『物理年鑑』)に何度か寄稿している。1800年(5月)からは Göttingen 大学へ移り、数学を専攻した。
- 14) Hahn, Karl-Heinz: *Einleitung*. In: Arnim, Ludwig Achim von: *Werke in einem Band*, Berlin u. Weimar 1981, S. XLII.
 - 15) 『旧約新約聖書大辞典』 1989年 教文館 155ページ。
 - 16) 馬場嘉市編 『新聖書大辞典』 1971年 キリスト新聞社 314ページ。
 - 17) Seidel, Ina: *Drei Dichter der Romantik. Clemens Brentano, Bettina, Achim von Arnim*, Stuttgart 1944, S. 197 f.
 - 18) Riley, Helene M. Kastinger: *Achim von Arnim in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Reinbek bei Hamburg 1979, S. 16.
 - 19) 「父の領地 Friedenfelde は1818年に売られた。それにもかかわらず経済的困窮は終にならなかった」(Riley 1979, S. 97)とあるところを見ると、これはアルニムが相続したと考えられる。
 - 20) Wahrig, Duden などの辞典によると、17世紀以来のドイツ法で、この制度によると、家族の財産(たいていは土地)は分割せずに遺贈され、譲渡や売却はできず、その所有者はその収益のみを自由にすることができる。多くの場合長子相続で、身分の低い貴族の間でよく行われた。訳語としては他に「家族世襲財産制」「限嗣相続」などがみられるが、どれも内容を十分に伝えていない。
 - 21) 祖母にとっての息子つまり Onkel Schlitz は結婚して妻の家を継いだ。またアルニムの兄 Otto は結婚していなかったし、将来その当てもなかった。アルニムは自分が結婚して子供を設けなければ、相続人がなくなるだろうことを恐れた。祖母は、死後もアルニムの生き方を支配したとも言える。
 - 22) Vordtriede, Werner (Hg.): *Achim und Bettina in ihren Briefen. Briefwechsel Achim von Arnim und Bettina Brentano*, Frankfurt a. M. 1961; 2. Aufl. 1985, Bd. 1, S. 19. (26. und 27. Sept. 1815)

Achim von Arnims *Die Majoratsherren*

Maya NINOMIYA

A. v. Arnims Erzählung *Die Majoratsherren* (1820) fand lange Zeit allgemein wenig Beachtung. Bekannt ist uns die frühe heftige Kritik Jacob Grimms, der Dichter vergeude in der „sündlichen Verwirrung seiner Pläne die schönsten Gaben“. In seiner Erwiderung sah Arnim die Qualität des Werks verkannt und er, der damals unter Schwierigkeiten ein Erbgut bewirtschaftete, bemerkte verbittert und zugleich aufschlußreich, daß seine landwirtschaftlichen Produkte besser von ihm zeugen würden.

In einem 1960 erschienenen Aufsatz trug Heinrich Henel zu einer Neubewertung der Erzählung bei. Er filtrierte zu diesem neuen Verständnis folgende fünf Aspekte aus der Erzählung:

1. In Art einer Detektivgeschichte wird die verborgene Herkunft Esthers und des jungen Majoratsherrn gelüftet.
2. Die Darstellung von vier Personen.
3. Eine Kritik am ancien régime.
4. Aus der Gegenüberstellung von Spiritualisten und Materialisten und ihrer Einseitigkeit ergibt sich ein Bild vom wahren Menschen.
5. Eine religiöse Bedeutung.

M. E. läßt sich, auf den Titel „Die Majoratsherren“ bezogen, ein weiterer Aspekt in der Erzählung hinzufügen.

Es fällt auf, daß die meisten der Figuren ohne persönlichen Namen sind. Sie werden teils bei ihren Ständen genannt oder tragen biblische Namen, die auf Charaktereigenschaften ihrer alttestamentarischen Trägerinnen verweisen. Kurz: Die Figuren sind nach ihrer Rolle in der Erzählung bezeichnet. Sie regen sich sozusagen wie

Marionetten.

Die Hauptrolle ist der Majoratsherr, der mehrheitlich und damit in verschiedenen Eigenschaften seiner Träger auftritt. In diesem Verfahren kritisiert Arnim das Majoratsamt und er weist im einzelnen darauf hin, wie es seine Träger beherrscht. Sie verlieren ein menschliches Maß: der alte Majoratsherr als Hüter des Vermögens, der junge unter dem Druck der Pflichten und der Vetter als Materialist. Es gibt ferner „die Majoratsherren der Juden“, die als privilegierte Tiere das feudale Majorat der Menschenwelt karikieren. Die übrigen Figuren der Erzählung sind in die Majoratseinrichtung verwickelt und begehen Verbrechen.

Ein Blick in Arnims Biographie verdeutlicht, daß er seine Pflichten als Gutsherr der ererbten Ländereien ernst nahm. Es ist schwer zu sagen, wie er den zweifellos bestehenden Konflikt zwischen seinem Talent und der ihm durch Herkunft zugefallenen Lebensform austrug. Doch scheint in der Gestaltung des jungen Majoratsherrn einerseits Arnims Sehnsucht nach einer „höheren Welt“ zum Ausdruck zu kommen, andererseits in der oft ironischen Schilderung der Tatenlosigkeit des Majoratsherrn Arnims Pflichtbewußtsein anzuklingen.

Arnim scheint hier, mehr als allgemein angenommen, im Dichten einen Ausgleich gefunden zu haben.